



『お釈迦様はおっしゃいました。山も川も空も海も、花も鳥も動物も、君も私もみんな尊い。そのまんまでみんな素敵なんだよって。だから…やさしくなれる。だから…仲よくなれるって。なのに今…どうして憎しみ合うの？どうして争わなくちゃいけないの？みんなみんな尊いのに。お釈迦様は本当に悲しんでおられます。早く気づいてって願っておられます。』

…花まつりのおはなし…

今から2,500年ほど昔、インドにカピラバストゥという小さな国がありました。王様はスッドーダナ、妃はマヤといました。マヤ夫人はある夜、白い象が天からおりて来て右のわき腹に入るといっても不思議な夢をごらんになりました。これは「世の人々の苦しみを救う偉大な王子がお生まれになる」という夢のお告げだったのです。のちにマヤ夫人は出産のために里帰りをされました。旅の途中、ルンビニというそれは美しい花園で一休みされたのですが、そこでお釈迦さまはお生まれになりました。伝説によりますとその時、天からは甘くかぐわしい、命をはぐくむ雨が降り注ぎ、お釈迦さまは右手は天を、左手は地を指さし「天上天下、唯我独尊（てんじょうてんげ、ゆいがどくそん）」とおっしゃったのでした。この言葉は「この世で尊くないものは何ひとつない。みんなそれぞれがそれぞれにすばらしい」という意味です。だから傷つけてはいけない、奪ってはならないのだと。だから許し合い、認め合うことができる。これがお釈迦さまお誕生の逸話であり、お釈迦さまの願いなのです。

人々が傷つけ合うことなく、互いに尊重し合い、いのちのすばらしさを飲み合えるほんとうの平和な世の中がおとずれますように、心から祈りましょう。みんなで祈り続けようではありませんか。

（正光寺花まつりパレード配布用チラシより）

数年前のある日、東京のある出版社から電話があり、「正光寺さんでは花まつりを復活されたと同じでしたが、どのような工夫をなさっているのですか？」と。花まつりのような伝統的仏教行事がすたれかけていることを危惧すると同時に、励ましや声援を頂いたような取材でしたので、ご紹介させて頂きます。

(興山舎発行「月刊住職」平成二十六年四月号より転載)

積尊降誕 会を必ず 成功させ る実践

少子化にも負けない全国六カ寺に学ぶ

花まつりに子供が集まらないという悩みを聞く。やめてしまふ所も多いようだ。だが近年復活させたり、工夫で参詣者を増やしているお寺もある。その状況の秘訣とは。

白象パレードを復活し大盛況 静岡県・臨濟宗方広寺派正光寺

「昔は花まつりや白象の意味はみんな知っていたのに、いまの人は分からなくなっていました。これはまずいなあと危機感を感じて花まつりを復活しました」

静岡県浜松市にある臨濟宗方広寺派正光寺の松尾正澄住職(五十八歳)は話す。

正光寺では昭和三十年代、先代の時代に白象を手作りし、花まつりに町内で白象パレードを始めた。当時の写真を見ると大勢の子供で、大賑わいなのが分かる。だが、いつしか途絶えてしまった。松尾住職は子供に花まつりが伝わらないことを危惧し、眠っていた白象を使って平成十九年に白象パレードを復活させた。開

催は毎年四月の第一日曜日だ。

朝十時。誕生仏を背中に載せた白象がお寺を出発。子供から大人まで数十人が長いロープを引く。子供は普段着で気軽に参加。お寺の周囲約四キロを二時間かけてゆっくりと一周する。行列には十数人の御詠歌隊と数人の虚無僧も加わる。和讃のお唱えと尺八の吹奏を交互にするのが珍しく、人目を引く。

事前準備には警察から道路使用許可を

もらう。

コースは

交通量の少ない道を選ぶため通行止めにはしないが、檀家が随所に交通係として立ち、十分注意する。当日は役員を中心に二十人が手伝う。約一カ月前に告知チラシを作り、回覧板に入れたり、家々にポステイングしておく。

賑やかな行列につられて沿道には多くの見物客が出てくる。世話人が一人一人に紅白まんじゅうを手渡す。お寺が特注したかわいらしい白象の焼き印付きで四百人分を用意。小学生にも分かるような易しいお釈迦様の言葉と花まつりの由来

を書いた小さい紙も同封してある。花まつりを知らない人にも意味を知ってもらえるよいアイデアだ。《このおめでたい紅白のおまんじゅうはお祝いのおすそ分けです。人々が傷つけ合うことなく、互いに尊重し合い、いのちのすばらしさを

喜び合えるほんとうの平和な世の中がおとずれますように心から祈りましょう》とお寺のメッセージも記してある。

途中で三回、檀家宅の庭先を借りて休憩。それぞれ誕生仏を安置して甘茶かけをする。檀家が自主的にお茶やお菓子な

どを用意して協力してくれるという。「三カ所の休憩所でスタンプラリーをして景品を渡したり、毎年少しずつ工夫しています」と松尾住職。パレードに参加しなくても灌仏だけに来る近所の人もうんといる。

興味を持ち、途中から



途絶えていた白象パレードを復活した正光寺



子供たちに加え虚無僧や御詠歌隊も行列



3カ所の休憩所と最後はお寺で甘茶かけ

加わる人も多いので、お寺に着く頃には百三十名ほどに増えている。最後は誕生仏に甘茶をかけて、般若心経をみんなで唱える。子供たちには念珠ブレス、饅頭、お守りなどの

ご褒美の詰め合わせが待っている。「小さな子も頑張ったと感じてもらえるのではないのでしょうか。心に何かが残ってくれたらいい。昔に比べて娯楽が増え、子供を集めるのは難しいですが、毎年継続することが

大切。準備や費用の負担を少なくするのも長く続けるコツなのかも知れませんか。」(松尾住職)